

11 わが国における精神科ソーシャルワーカーの黎明 (その1)

橋本 明

愛知県立大学文学部

いわゆる精神科ソーシャルワーカー (PSW) は、二十世紀のアメリカで発達した。古くは1905年、ボストンのマサチューセッツ総合病院での活動に遡るといふ。1913年にはボストン精神病院で、医師サザード (E.E. Southard) とソーシャル・サービス部のジャレット (M.C. Jarrett) の指導のもと PSW の教育訓練が行われた。やがて1920年代にかけて、各地の精神病院に次々に PSW が配置された。

PSW の展開には、精神医学者アドルフ・マイヤー (A. Meyer) の影響が大きい。『社会診断』(1917年) で知られるリッチモンド (M.E. Richmond) はマイヤーと親交が深く、彼女のケースワーク理論には力動精神医学的な要素が色濃く反映し、PSW の実践活動の理論的な基盤を用意した。また、第一次世界大戦による戦争神経症患者の大量出現は PSW の活動領域を広めた。このニーズに対して、1918年にマサチューセッツ州のスミス・カレッジ (Smith College) は戦時緊急コースとして、アメリカ最初となる高等教育機関での PSW の養成をはじめた。スミス・カレッジのレイノルズ (B.C. Reynolds) は PSW が「情報の運び屋、あるいは治療場面で簡単な使い走りをする援助者というだけではなく、独自の専門的視点を持つ女性集団であり、精神科医ができない患者の社会的な調整を行うことができる」と述べている。さらに、PSW の社会的認知に重要だったのは、元精神病患者ビアーズ (C.W. Beers) の活動に負うところが大きい精神衛生運動 (mental hygiene movement) である。彼が事務局長をつとめ、1930年にワシントンで開催された第一回国際精神衛生会議は、アメリカにおける精神衛生運動の頂点だった。

日本に目を転じると、1920年代終わり頃、東京府立松沢病院では PSW を意図したといわれる「遊動事務員」の配置計画への言及がある。だが、わが国における PSW に関わる本格的な議論は1930年の国際精神衛生会議以降といえるだろう。この会議には日本代表として、三宅鑛一 (東大) と植松七九郎 (慶大) が出席した。会議の翌年の1931年に創刊された雑誌『精神衛生』の記事「第一回精神衛生国際会議の収穫」には、この2人の出席について「本邦の精神衛生の歴史に特筆大書すべき事項」とある。さらに、討議内容を紹介した「精神衛生関係の社会事業」のなかで「各国は精神衛生ソーシャル・ワーカーの練習に必要な施設をなすべきこと。此練習は特殊学校の社会的例別作業 (ケース・ワーク) の基本課程たるべきこと。課程には精神病関係社会事業に須要なる精神病学、心理学、内科学の大意を含むべきこと。以上の課程には学説と実地練習とを並行せしむべきこと。以上の課程に入学するものは高等専門学校若しくは大学卒業若しくは之と同等の素養あるものたるべきこと」などと、今日の精神保健福祉士国家資格にも通じる内容が書かれている。

村松常雄 (東大) も『精神衛生』で PSW やその業務内容について積極的に発言している。「精神衛生相談なる事業は精神衛生運動の実際的事業として最も重要なものの一つであって、精神の健康、異常、疾病其他に関する一切の相談に応じ、鑑別、診断、処置等を行ふが、原則として医療は行わない建前を普通とすることは他の健康相談に於けると一般である」と述べ、「右の事業のためには精神科専門医師の外に、精神衛生の教育訓練を受けた社会婦、又は保健指導婦、又は公衆看護婦を必要とする」という。村松常雄はアメリカ留学中 (1933~1935年) にはビアーズとも親交があり、戦前・戦後を通じて精神衛生の普及に努めた。しかし、わが国における PSW の登場は、第二次世界大戦終結後の村松の取組みを待たねばならなかった。